

※このファイルは LEICA STYLE MAGAZINE 2013 VOL.13 を  
元に照井康文が制作しました。 [川田喜久治 TOP](#)

FEATURE 赤城耕一／ライカ M「ライカを変えずにライカを変えた」  
柏木龍馬／ライカ M-E の世界

SHOP NEWS 「ライカそごう横浜店」オープン

SPECIAL INTERVIEW

レスリーキー

「ライカで撮りたかった、人間の愛のかたち。」

# LEICA STYLE MAGAZINE

巻頭特集 PLAZA

## 川田喜久治

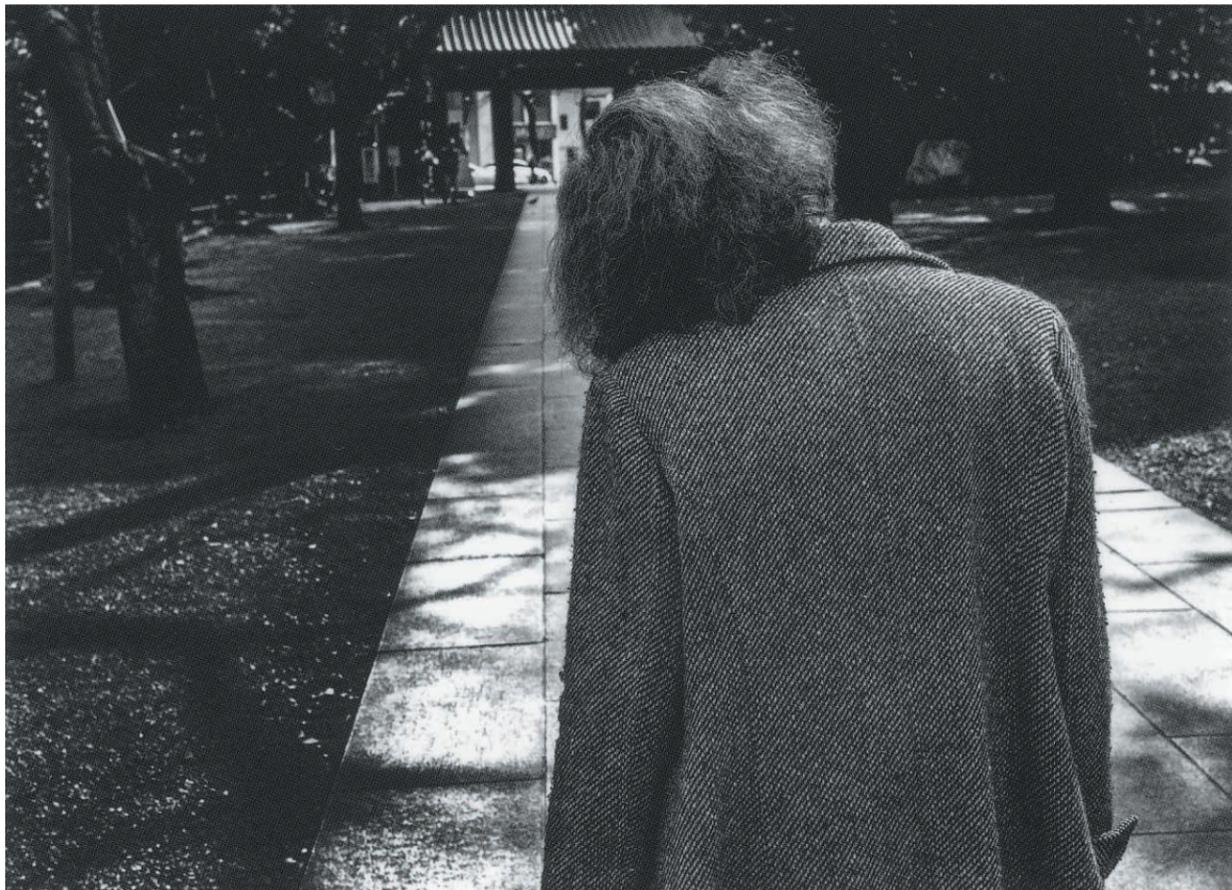
不明な現実を切りとる。



2013  
VOL. **13**



ライカ M モノクローム ライカズミクロン M f2.0/35mm ASPH



ライカ M モノクローム ライカズミクロン M f2.0/35mm ASPH

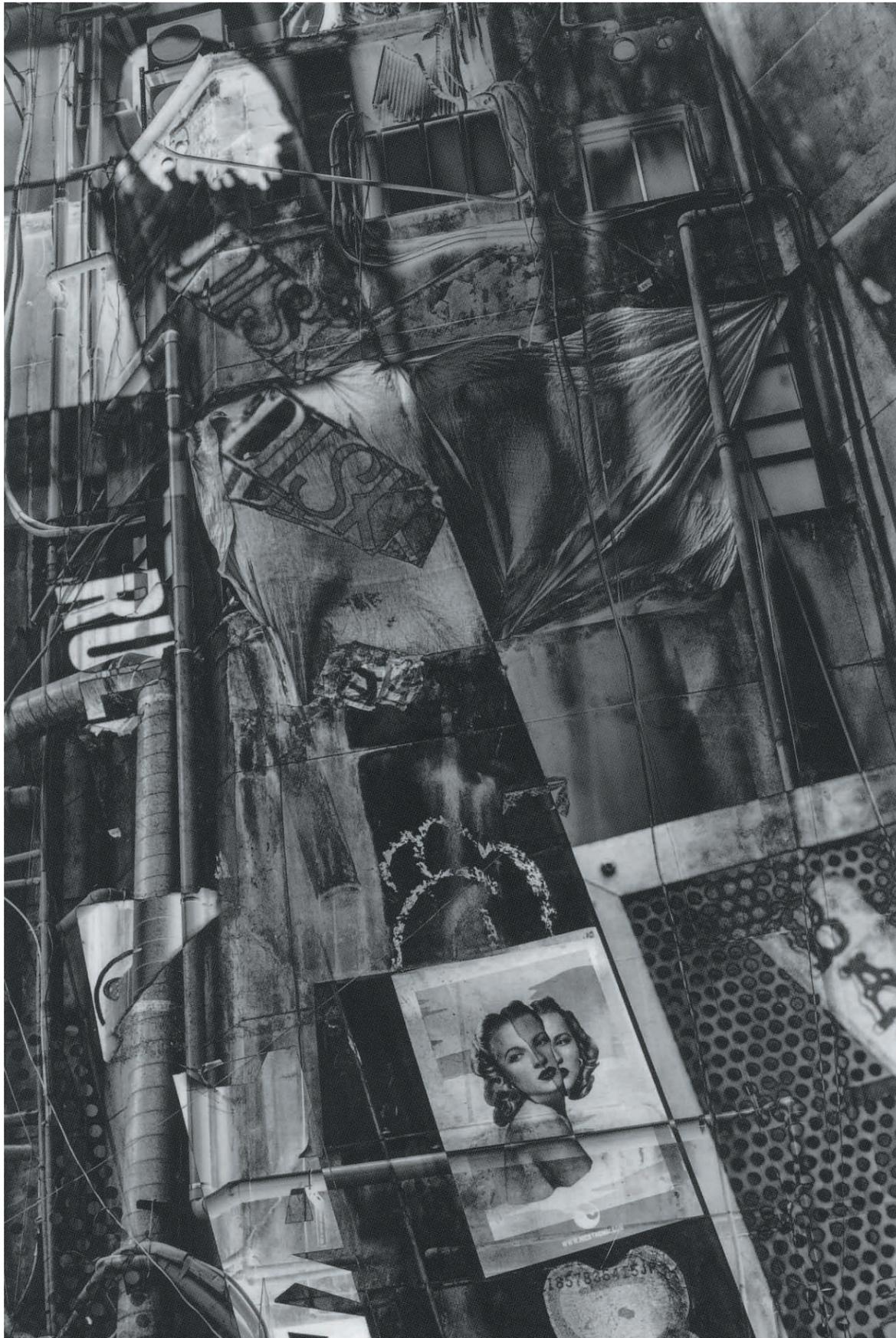


ライカ M モノクローム ライカズミルックス M f1.4/50mm

川田 喜久治  
不明な現実を切りとる。

ライカ銀座店 2 階のライカギャラリー東京で開催されている川田喜久治写真展「Unknown アンノウ 2013」。ライカ M モノクロームで切りとった作品の数々は、一体何を訴えかけているのか。そして、どんな考え、想いから生まれてくるのか。独自の視点、流儀で長年活躍し続ける氏にお話をうかがいました。





ライカ Mモノクローム ライカズミルックス M f1.4/35mm ASPHERICAL



ライカ Mモノクローム ライカズミルックス M f1.4/50mm

作品のテーマは、  
自分自身にもわからない。

小説を書かない小説家がないのと同様、私は毎日写真を撮ることがプロの写真家だと思っています。いいものが撮れても、撮れなくても、とにかく毎日カメラを持って撮影する。そして、カメラのレンズが自分の目と同化するくらい感じたものに瞬時に反応し、対象を切り取ることが理想だと思っています。毎日継続して撮り続けるための秘訣は、変に意気込んだり、難しく考えたりせず、自然体で遊ぶように撮影することでしょうか。写真に対して、プロに負けない程度の情熱やエネルギーを持つているアマチュアの方もたくさんいらっしゃいますが、プロとの違いは毎日撮っていないことだと思いますね。

私はいま、テーマを設定して写真を撮るといことはほとんどしません。街を歩いていて、毎日200〜300回シャッターを切り、帰ったらその日撮ったものの中から何点かセレクトします。そうした行為を1年も続けると、自

分が何を求めていたのかが見えてきます。それが、テーマとして浮かび上がってくるのであって、撮っている間は自分でも予想できません。たとえば、今日撮影したものの中に、次の作品のテーマが含まれているかもしれないし、数ヶ月先に撮るものの中にそれはあるのかもしれない。言えることは、日々撮り続ける中に、いつも自分のテーマは存在しているということです。

新たな意欲をかきたてる、  
ライカMモノクローム。

80歳の誕生日に、プレゼントは何がいいかと家族に問われ、ライカMモノクロームをリクエストしました。鮮やかな色彩に満ちた現実の世界に対し、心が反作用するかのように禁欲的なモノクロームの表現を求めたのだと思います。今年の1月に手に入れて以来、毎日撮影し、寝るまで手離しません(笑)。触れていて気づいたのですが、ライカMモノクロームの外革の感触は人間の皮膚に近いと感じました。滑らずにしっかりとホールドでき、非常に素晴らしいフィーリングを備えています。描写は、当初想像していたより



ライカ M モノクローム ライカズミルックス M f1.4/50mm



ライカ M モノクローム ライカズミクロン M f2.0/35mm

も非常にシャープで驚かされました。ある時、六本木の街の裏手にある墓地を高い場所から撮影したのですが、拡大すると卒塔婆の一本一本までちゃんと読めるのです。高い解像感を備えているので、あとで自分が求めるギリギリの所までトリミングすることも可能です。また、全てRAWで撮影していますが、モノクロをRAWで撮るというこんな幸せなことはないですね。フィルム時代であれば、増感してやっとディテールを出していたような所も、いまはさほど苦労することなく表現できます。イメージした世界を自分で自在にコントロールできるという点でデジタルの良さを感じますし、非常に楽しく創作することができます。

象、ある意味、現実というものを越えていく表現だと思っています。日々の撮影の中で、私はそうした考えを覚えて持ち出し、意識的に狙って撮ることがあります。画面の中に抽象的なものを入りこませることによって、写真にスリリングな緊張感を生み出したいと思っています。

都市には、  
アンノウンな空気が漂っている。

毎日の生活の中で、私たちは錯綜した時間を過ごしていることが多いと思います。たとえば、まちのウインドウにはさまざまなものが映りこみ、反射し、本来とは違った姿がうかびあがっている。そこで暮らし、働く人々は、同じ風景を見ながらもそれぞれが違った考え、異なる想いを抱えています。私の作品の中には、多様な被写体を取り込んでカラージュしたのもありますが、それは時代の錯綜感を表現しているとも言えます。風景や人物や静物など、決まった被写体にレンズを向けてシャッターを切り、一枚の写真にすること。その写真がリアルであることに違いはありませんが、別の角度や方法によっ

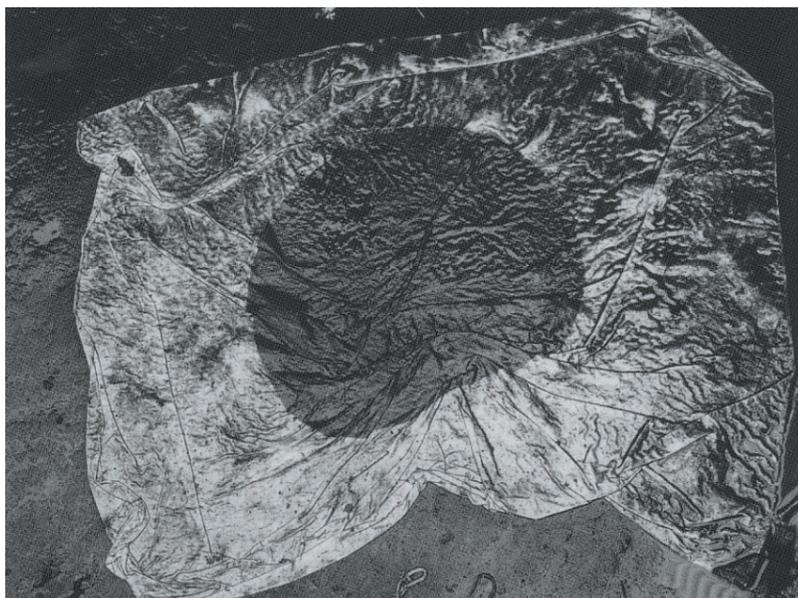


ライカ M モノクローム ライカズミルックス M f1.4/50mm

でも生きた表現はできると思いますが。ドキュメンタリーとは記録という意味ですが、記録だけで終わってしまう写真はあまりに単純でつまらない。いま、このときを反映した新しい表現ができればと思います。

ニュースなどを見ていると、毎日のように殺人や凶悪な事件が起きています。それはとても驚くべき事なのですが、私たちはいつの間にか慣れてしまい、さほど気にとめないようになってしまいました。毎日街に出てレンズを向けていると、そうした人間の心の変容が見てとれるようです。意味のわからない脅威や恐れ、驚きといったようなものがイメージとして自然にふくれあがってくるのです。私にとって、その怪しいイメージ

ジコソが「アンノウン」であり、都市には今日も不可解な表現が流れ、漂っています。



川田喜久治の代表作 THE MAP「地図」(1960～1965) 上：日の丸、下：コカコーラ



川田喜久治 (かわだきくじ)  
 1933年茨城県生まれ。  
 1955年立教大学経済学部卒業。  
 新潮社に入社、「週刊新潮」写真部。  
 1959年退社。  
 Photo Agency「VIVO」設立メンバー。  
 解散後、フリーランス。